

## 児童虐待の家族への心理的援助に関する研究

—臨床事例を中心にして—

竹内 康子

### 1. 問題

最近、乳幼児をもつ母親向けのテレビ番組や雑誌で子供に対する否定的な感情を直接に取り上げる題材が増加してきている。この現象は母性神話の崩壊により神話から解放された母親たちが弱さや欠点を素直に認めていこうとする現象との見方もできるが、一方で子供を虐待してしまう親が特殊で異常な存在ではなく、誰でも状況によっては潜在的にそうなる可能性を持つという警笛のようにも思われる。社会的・時代的背景として、核家族化・少子化・サポートシステムのなさ・女性の人生の選択の幅の狭がりなど子育てを困難にしている要因が伺われる。増加しつつある児童虐待の問題は親子関係の障害の顕著な反映と言えるだろう。「児童虐待 (child abuse)」とは、親または親に代わる保護者が非偶発的に (単なる事故ではない、故意を含む) 児童に身体的傷害、精神的傷害、あるいは性的暴行を加えることと理解されている。また「保護の怠慢ないし拒否 (neglect)」とは、児童虐待の一種ではあるが、より受動的で親または保護者が親を捨てたり、生きるために必要な衣食住の世話や医療などを与えない場合をいう。(児童虐待調査研究会 1985) 児童虐待への関心が高まったのは、Kempe, et. al. (1962) の「殴打児童症候群 (battered child syndrome)」の報告以来であるが、わが国ではこれが被虐待児童症候群と広義に翻訳されて主に小児科領域で紹介された。後にこれでは意味が狭すぎるので、より広義の児童虐待という語が用いられるようになり、各領域で関心が高まりつつある。しかし、わが国では児童虐待に対する体制・制度が整備されておらず、ケースの診断や評価が援助を実施する各機関や担当者個人に委ねられ、個々に取り組んでいる実状である。現在、児童虐待の援助に中心的な役割を果たしているのは児童相談所であるが、そこではケースが第三者の通告で持ち込まれるか、家出・徘徊をして保護された児童を調査するうちに背後に虐待が潜んでいることが発覚する等の契機がほとんどであり、家族自身が援助を求めているわけではない。また法的に強制力がなく、保護者と友好的関係を前提とした援助を試みて、どうしようもない時に親子を分離したり親権に制限を加えるという援助体制のため、在宅指導か施設入所かという視点での援助で手いっぱいであり、家族や被虐待児の治療までは行き着いていない段階である。さらに、虐待をする親は基本的信頼感に欠け

ているために他者を侵襲的で統制的な存在と捉え、社会的に孤立をすることで自らを防衛しているため、援助に対しても抵抗をして信頼関係を築き上げることは至難である。それに加えて援助をする側も、日本的母性信仰や家族神話のために、虐待をする親を非難したり子供を救済したいという逆転移感情を起しやすい。被虐待児も治療者との間に過去の親との関係を反復し、治療者が彼らを迫害して攻撃したくなるような感情を抱いてしまう傾向があり、親や児童が治療にうまくいかないことに対して治療者の自己愛が傷ついて、家族を見捨ててしまいたいという否定的な逆転移を起しやすいと言われている。以上のような要因により、児童虐待の家族に対する援助は非常に困難なものとなっている。

虐待の援助を考える際に、単に被虐待児を家庭から引き離すことを主眼とするのではなく、最終的には親との関係修復を図り、共に家庭で生活できることを目指すべきではないだろうか。虐待の状況が深刻でない場合には、在宅のまま家族との信頼関係を形成して援助的な関わりが持てるよう導いていくことが理想であるが、今のところ、様々なモデルやその組合せを試行錯誤しながら最も効果的な援助方法を模索している段階である。

### 2. 目的と方法

本研究は児童相談所で取り扱われた児童虐待の6事例をもとに、(1) 親子を分離した場合の被虐待児への治療・援助の在り方、(2) 在宅指導の場合の家族への援助の在り方を検討した。その際、視点として、① 被虐待児とその家族の心理的特徴と力動的相互作用を明らかにする。② 援助者や家族を取り巻く地域社会などの第三者との力動的相互作用を明らかにしながら、援助者に求められる課題を検討することを目的とした。

第1部の4事例は、一時保護された被虐待児に対して一時保護中に面接・検査・プレイを実施したものである。施設入所に到った3事例については入所後に訪問・プレイを実施した。第2部の2事例は在宅虐待事例であり、望まれない出生によって施設入所をし、家庭引取り後に虐待が発生して、困難な事態が起こる度に施設入所を訴えてくる2家族に対して児童福祉司と共に約2年間の在宅指導を試みたものである。事例Aは境界性人格構造を持つ継母の個人的心理援助を中心に、(a) 継母の母親としての役割適応の改善、(b) 実父との夫婦関係の調整、(c) 継母自身の精神内界・パーソナリティ障害の改善の3

つを目標に、事例Bは軽度精神発達遅滞の実母に対する福祉的援助を含む生活援助相談を中心に、(a)家族機能の強化、(b)合同プレイの実施による児童と異父弟との関係調整と母子相互作用の改善、(c)児童の通う地域の保育所・児童館学童保育所に対するコンサルテーション活動の実施による地域の援助体制の強化の3つを目標にして、家族への援助を展開していった。2事例ともに、必要に応じて児童の一時保護が実施された。

### 3. 結果と考察

(1) 被虐待児の心理的特徴として、対人関係の不安定さが見られ、愛着の問題と対象関係の問題が指摘された。被虐待児は自虐と加虐の両極を動きやすく、対人関係上で「攻撃するもの」と「攻撃されるもの」の関係を強迫的に反復し、相手にも相対する役割を演じさせてしまう傾向がみられた。彼らの持つ衝動性と治療者の抱く逆転移感情を考慮して、治療上の力動的相互作用を4つの段階に分けて提示し(表1)、治療・援助の在り方が考察された。また、摂食上の問題、家出・徘徊・盗み・持ち出し、虚言などの問題行動の意味も考察された。

(2) 児童虐待が起きている家族について、ステップファミリーの問題・親の子供に対する認知の問題・親の対人関係上の問題が考察された。その結果、①子供は親の無意識の葛藤を投影されやすい。②親の子供に対する「歪んだ知覚」や「高すぎる期待」の問題は「親が子供を自分の都合のよいように動かそうとしている試み」という視点でまとめて理解できる。③虐待親が外界を迫害的なものと知覚して対外的な関係が持てないことが虐待の一因となっている点が指摘された。

また、児童虐待の家族における両親と子供の三者関係の力動的相互作用を5つのタイプ(①両親が虐待、②片親が虐待をして片親が非難、③片親が虐待をして片親が傍観、④虐待親がもう一方の親から虐待を受けている、⑤片親が子供ともう一方の親の両者を虐待)に分類してモデルとして図示した。虐待という関係によって二者間に緊張が起きている場合に、第三者が

これに巻き込まれることによって緊張が分配され、家族内のバランスがとれて安定している点が指摘された。

そして、児童虐待の家族に対する有効な援助方法を項目を挙げて具体的に提示した。その概要は、Weakland & Jordan (1992) が提唱するような構成主義短期療法的なアプローチに加えて、親の内的葛藤に焦点付けた支持的な個人的心理援助と地域心理援助活動を基本としたものである。

(3) 児童虐待が起きている家族では「攻撃するもの」と「攻撃されるもの」の関係が強迫的に反復され、そこに第三者が介入することにより「三角関係」が発生し、さらに虐待がエスカレートするという現象が見られる。児童虐待の家族への心理的援助における力動的相互作用を援助者の視点に基づいて、5つのタイプ(①かわいそうな子供と悪い親、②かわいそうな親と困った子供、③困った子供とよい親、④かわいそうな親子と悪いもう一人の親、⑤困った家族)に分類してモデルを図示し、どういうケース・援助者の場合にそうした逆転移が起こりやすく、その結果、援助者を含めた力動的相互作用がどう変化するかについて考察した。児童虐待の家族に対する心理的援助は、至る所に「三角関係」が存在している構造であり、援助者が複数の時には構造は一層複雑なと思われる。親子並行担当制をとる場合には「三角関係」の二重構造が形成され、援助を受ける側も自分の担当ではない援助者に否定的な感情を持ちやすい一方で、援助者同志が「連合」しているという矛盾した構造に置かれ、援助者が「よい対象」と「悪い対象」に分裂してしまう結果、援助が中断しやすいと考えられる。

援助者に求められる課題として、(a)自分の置かれている立場や自分におこっている逆転移感情を適切に理解すること、(b)各領域の専門家とチームを組み、それぞれの役割を明確にして、ケース理解とコンサルテーション活動を促進・展開していくこと、(c)効果的な援助方法を探求し、援助体制を整備していくことの3点が指摘された。

表1 被虐待児の治療過程における精神力動

段 階		第1段階 マゾヒズム (masochism)	第2段階 前マゾヒズム (protomasochism)	第3段階 サディズム (sadism)	第4段階 統合された自己 (cohesive self)
被 虐 待 児	対象関係	分裂した部分対象	分裂した部分対象	分裂した部分対象を統合していく過程	恒常性ある 対象イメージの獲得
	精神力動	よい部分対象の誇大的自己愛が悪い部分対象の依存性を攻撃。依存性を否認。	治療者から悪い対象イメージを引き出して、コントロールしようとする試み。	攻撃者への同一視。誇大的自己愛や万能感により、悪い対象イメージを投影された治療者を攻撃。治療者のよい対象イメージと悪い対象イメージを統合しようとする試み。	治療者を自己対象として内在化。 健全な自己愛の形成
	転移感情	懐疑・不信	見捨てられる不安・迫害される不安	報復 vs 理想化	信頼感
	行動化	観察・見かけ上の愛着	挑発	攻撃 vs 依存性の表出	愛着関係の成立
治 療 者	とらされる役割	救済者役割	迫害者の役割 vs 理想化された救済者		安定した他者
	逆転移感情	かわいそうな子供	憎らしい子供・攻撃して見捨てたくなる感情 vs 受け身的に痛みを共有したい感情		
	治療的姿勢	一貫した抱える環境 (holding environment)			